

キリストの光のキリスト

聖ペトロ 聖パウロ使徒 6月29日

(マタイ16・13-19)

ある大学の「生死学」の講義の様子が夜のニュース番組で放映されていた。詳細は覚えていないが、だいたい次のようなことだったと思う。

階段教室にほぼ一杯の学生たちに教授が問い掛ける。「あなたにとって一番大切なものは何ですか」。思い浮かぶ大切なものを、一つずつ十枚の紙切れに書く。

架空のストーリーが設定される。自分が闘病生活をしながら死へと向かっていく話。自分がそのようなになったら…。大切なものを五つに絞る。学生たちは少し考えて五枚を残す。他の五枚は破るように教授が命じる。

さらにストーリーは続く。話が進むに従って、つまり死が迫

大切なもの、者

るに従って、大切なものを絞る、残していく。他のものは破っていく。そのたびに学生は頭を抱え、苦悩する。多くの学生は泣き出していった。

大切なものを捨てる悲しみ。

大切な者と別れるつらさ。最後に残った紙は自分にとって「いちばん」大切なもの。「ほんとうに」大切なもの。それを書いた最後の紙も破らなければならない。

多くの学生が最後まで残した紙には「母親」と書かれていたという。どんな時でも自分を無償の愛で包み込んでくれる存在だからだろう…。教授は学生の心裏をそのように読み取っていた。音楽に長けていた一人の男子学生は、最初の紙に迷わず「音楽」

と書いた。その紙を破る時の苦惱。すべての紙を破った後、いちばん大切なものに気づいた。身近な存在である親、母親。これからは親、きょうだいとのつながりを最優先して大切に



する、と感想を述べていた。

しかし、死は大切な人、愛する人をも切り離してしまう。紙に書いた大切なもの、大切なものは、破りたくなくても破られてしまう。

もし、その紙に「神」と書い

たならば：それは死んでも残る唯一の者かもしれない。たとえ自分で破ったとしても、その存在は残り、続く。

最近、考え込んでしまう。信じて生きるとはどういうことなのか。「信者」であるとはどういうことなのか。今、生きていることは偶然のことなのだろうか。べつに神とのつながりがなくても生きていけるのだろうか…。

死を眼前に据えて、人生の意味を自分に問い掛ける。大切なもの、大切な者を書き留めた紙はすべて破らなければならぬのだ。

イエスは弟子たちに尋ねた。「あなたがたはわたしを何者だ

と言うのか」。シモン・ペトロが答える。「あなたはメシア、生ける神の子です」。イエスは今日もわたしに尋ねる。「あなたにとつてわたしは何者なのか」

わたしは答えたい。「あなたは：わたしにとつて…いちばん大切な者…です」

「あなた」と書いた最後の一枚の紙は決して破ることはできない。

(山元眞||福岡教区司祭/カット||高崎紀子)

今週の福音

7月

30日	・月	マタイ	8	18	—	22
1日	・火	マタイ	8	23	—	27
2日	・水	マタイ	8	28	—	34
3日	・木	ヨハネ	20	24	—	29
4日	・金	マタイ	9	9	—	13
5日	・土	マタイ	9	14	—	17